

平成23年度 和歌山県名匠

【表具師】

ひょう ぐ し
むら き ひろ やす
村 木 弘 育

【現住所】高野町

【生 年】昭和18年

業績及び経歴

18歳から表具師であった父村木康悦氏のもとで修業を続け、父親の没後も家業の表具一筋に、常に『後世に残す』という信念のもと技能の研鑽に励む。その確かな技と経験が高く評価され、高野山における数多くの文化財の修復に格別の腕前を発揮している。

軸の表具には、表装の対象である「本紙」に合った裂地を取り合わせることはもとより、高野山という湿気が特に多い環境を考え、「本紙」の反りや曲りを防ぎ、四季の変化に十分耐えられるよう、仮貼りを長期間行った後、仕上げている。

襖の制作では、丈夫で長持ちすることと燃えにくいという利点から、上貼りに「間似合」という、泥を施した手漉きの紙を多く使い仕立替えを行っている。今日、「間似合紙」は大変高価なものになっているが、文化財の保護・保全を最優先に考え、古来から文化財などに用いられてきた素材にこだわり使用し続けている。また、肌裏には国指定重要無形文化財の薄美濃紙を使用し、下貼りには楮紙を使い、骨縛り、蓑貼り、蓑縛り、袋貼りを施すなど、脈々と受け継がれてきた匠の技を引き継いでいる。

金剛峯寺庫裡大広間襖の修復仕立直し、金剛峯寺伽藍内金堂十二天六曲屏風の仕立直し、奥の院山水屏風の仕立直し、遍照光院庫裡古画襖、床、壁面の修復仕立直しなど、日本の宝とも言える高野山の数多くの文化財の修復・保存に果たした功績は多大である。